

「よみがえりの命」

(コリント人への手紙第二 4 章 7 節～18 節)

「いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです」(4:10)

仲森文穂

今日のメッセージ要旨

○パウロは 4 : 7 で「四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害にあっても見捨てられない。倒されても滅びない」と語っています。これは彼の実体験でしょう。なぜ、彼はそんなことができたのでしょうか。牧師になる前、信仰の先輩方が教えてくれました。「神を知らない人は、東西南北の四つの方角しか持たない。しかし、イエス・キリストという宝をもつ人は、上という 5 つ目の方角がある。四方から困難がやって来ても、天に逃れ道がある」と。途方にくれても、迫害に遭っても、見捨てられても、眼を上を上げさえすれば、そこに神の助けが備えられている、確かにその通りです。

○パウロは伝道者でした。伝道に伴う苦難を、彼はどう受け止めたのでしょうか。10 節で、彼は「わたしたちは、いつもイエスの死を体にまとっている」と言っています。救いを宣べ伝えるために必要な苦難なら、イエス様に倣って受け入れていこうという覚悟が、パウロにはあったのです。イエス様の死と復活は、パウロの人生において、見事に一つになっていました。自分がイエス様の死を身にまとるのは、イエス様のいのちを自分の身に受けるためでした。

パウロは自分のことを土の器と呼んでいます。それはどういう意味でしょう。まず、壊れ易い。苦難に遭えば落胆もする。八方塞がりになれば途方にくれる。第 2 に、人は土から作られたので弱くもろく、時が来れば土に帰る(創世記 2 : 7)。信仰を自分を磨く手段だと勘違いする人がいますが、どんなに磨いても土の器が金の器になれるはずはありません。パウロも若い頃は修業三昧でした。自分を磨くのに一生懸命でした。しかしキリストに出会って、そんな自分に死に、キリストのいのちに生きる者となったのです。

○パウロは病いを抱えながら、アジア、ギリシア地方を巡って伝道しました。嬉しいこともあれば、みじめさに打ちのめされることもありました。「四方から苦しめられても行き詰まらず・・・」と言えたのは、パウロの力ではありません。彼が弱い時に働く神様の力がそう言わせました。言い換えると、パウロという土の器にイエス・キリストという尊い宝が宿っているのです。その宝をみんなと分かち合うために、神様は、自分のような弱い器を「あえて」選んで御用に用いてくださった、とパウロは言います。私たちも「土の器」に過ぎません。しかし、弱い自分が「あえて」選ばれたのは、イエス・キリストという宝を多くの人に伝え、よみがえりの命を祝福のうちに分かち合うためなのです。